

第6章 社会林業とアグロフォレストリー

アグロフォレストリーという言葉が普及し一般にも定着してきた頃に社会林業という言葉が知られるようになってきた。社会林業は Social Forestry という言葉の日本語訳であるが、外国では古くから Community Forestry として知られていた。つまり、これは Forestry for local community development の意味で地域住民(主として農村地帯の)にとけ込んだ林業活動の形態であり、ある種の林業施策である。従って、地域共同体も含まれるが、換金作物を得るために植栽される個別の造林行為や小規模で家内的な、あるいは地域社会の活動に使われる木材生産や加工産業に資する程度の木材利用を認め、地域社会の産業や福祉に貢献しうる範囲の造林や林業を如何に定着させるのかを目指すものとする。開発途上国の大半が生活エネルギーを木質系資源から得たり、食糧や家畜の飼料を植物に依存している部分が多いので、これらをより効率的に生産するために導入する手法がアグロフォレストリーである。つまり、必要な作物や樹木の組合せによるシステムの構築と実践である。例えば薪炭材を得るために薪炭林を造成するとしよう。計画に従って、ある土地に薪炭材の1つである *Leucaena leucocephala* を植栽する。単純に *Leucaena leucocephala* のみを植えて薪炭林とすれば社会林業のカテゴリーに入ってしまう。しかし、この樹種は薪炭材以外にも庇陰樹として利用できるのでこの場所に農作物も栽培すればアグロフォレストリーの形態を示すようになる。だからアグロフォレストリーは社会林業そのものではないことがわかる。しかし、社会林業のなかに取入れられるアグロフォレストリーもある訳だから両者間で混乱を生じることも事実である。従来、わが国で行われてきた森林を造成するという行為の多くは数十年後にその樹木が成熟したとき、家具や建築用材のほか、パルプ材などとして利用するために造林してきたものであり、たとえそれが国有林であろうと民有林であろうといずれも林業経営を目的としたものであるから産業造

林あるいは企業造林と呼ばれる。これが林業そのものの本質というべきものである。少なくとも産業とか企業とかで「業」という用語がつく以上は経済行為が常に付帯するからである。ところが、森林には治山、治水、防風、風致など公益的機能も持合せているので防災や景観上保持しておかなければならない森林もある。これは前者とは違った立場で造林するので、これを環境造林と呼ぶようになっている。つまり、造林のための投資は行なうが資金の回収や採算面の経済的背景を無視した公益事業とするものである。



写真 25 半乾燥地帯での薪炭材(*Acacia arabica*)は形も悪く、炭化するのも容易ではない。(カラチ、パキスタン)

社会林業が住民のための造林であり、この中で行われるアグロフォレストリーも地域を対象とした造林であって経済行為が伴わなければ単なる社会造林だし、経済行為を伴わせるならば社会林業ということになる。この造林の対象地は村落もしくは地域の共有地などである。一方、産業造林は国有地、私有地などあらゆる土地で行われるが、少なくとも社会造林よりも対象面積は広い。また環境造林では面積の大小に関係なく、

必要なところで植栽が行われ、所属は公有地もしくは国有地ということになる。

社会林業で利益がもたらされた場合はいずれも住民に還元されるものだけに計画策定に地域住民が参加し、事前の調査を十分に行なって地域の特性、生活レベル、文化、宗教を把握しておく点はアグロフォレストリーの場合と全く同じである。少しでも早く収入を得たい所得者層も多く加わるようにすることが望まれるだけに、まず資本を必要としないで生活を確保し、併せて現金収入も見込めるようにする点では、社会林業とアグロフォレストリーは歩調を同じくしている。

ただ少し違うのはアグロフォレストリーがあくまで農民の生活の中に緑のある自然が保たれることであり、自然（生物）と人間との共生的な意義を持った育林方法だといえる。つまり、これが共生造林といわれる所以である。

社会林業の例をとりあげてみるとインドの場合、州当局もしくは住民が行なう燃料材や飼料木生産を目的とする造林のときは道路、鉄道、水路沿いなどの公有地へ帯状に植林している。州当局が住民を雇用して行なうものには燃料材、飼料木生産や土壌保全を目標に国有地の荒廃地の復旧造林として実施している。住民のみが燃料材や飼料を生産するときは共有林に植栽する。しかし、農家が単独で実行している場合、目的は燃料材、飼料木、果樹のほか、アグロフォレストリーを含めて農家林に植栽している。このほか土地を持たない農民については苗木を援助して社会補助金をもとにした植林が行われている。これらのことをおこなうために州の林業当局は職員に研修や造林機材を与えて機能強化を図るとともに、普及による住民への啓蒙を行なっている。それにしてもインドにおける社会林業は農山村開発、とりわけ貧しい農民の福祉向上をはかるための手段としていることは明らかで、いずれの植林も地域住民の参加を通して彼らに利益となる森林造成をめざしているものであり、単に林業労働者として住民がかかわりをもつものでないことは確かである。

タイ国の社会林業には林業村 (Forest Village) の造成がある。1つは王室林野局による人植民を雇用するもので国有林内に不法占拠している農民を入植地へ移住、定着させて、天然林の保全を図る目的で国有林への入植造林をさせるものである。この方法では入植者への農用地の割当て、住居地の割当て、設置された学校へ電気や水道の供給、診療所の所要機器の配備などがある。そして今1つの林業村は木材 (林産) 会社によるもので、これが前者と違う点は木材資源造成のための造林であるということである。したがって人植農民によるタウンヤ式アグロフォレストリーを実施するため、植林地の割当てがあることや住居地の割当てがあることでその他は前者と同様である。このほか土地の無い農民に対して耕地を提供し、割当て地の20%以上の植林を入植者に義務づけている入植組合の植林プロジェクトがある。この場合は苗木の無償配付や農協の農業機械の無償貸出しなどが行われている。信仰の厚いタイ人にとって寺院は小さな村々にあって大切にされている。よって住民が公有地、寺院所有地、学校有地に造林を行なうことが熱心にされている。ここでは燃材、小丸太生産、村落共有林の造成などがあり、このVillage Woodlot プロジェクトを通して林野局職員の研修、公有地でのタウンヤ法による農耕、経済調査なども行なわれている。

ケニアにおける社会林業については肥沃な農業地帯と称することのできる面積は国土の20%で、増加する人口の食糧を賄いきれなくなっている現状から、多くの人々は農業地帯に近い半乾燥地に集まって来ており、サバンナ林という低生産性の脆弱な自然環境では年間降水量の不足もあって生産向上に困難を極めている。この地域に入植する人達のパターンはまず疎林を伐採し、開墾するのであるが、伐採木は木炭か薪にする。この売却費を元手にメイズやピジョン豆を栽培するが、これも降水量次第で収穫量が変動する。もし収入が減れば樹木を伐って炭を焼くので、疎林がより早く減少するのは無理もないことである。問題は住民のニーズに合った森林や樹林を造成し、住民の生活向上に役立つ環境を作るこ

とにあり、国家が資金、土地、技術を有していれば何ら苦慮することはないが、それでも住民の好まない土地利用や樹木を植えたのでは不満のみが残ることになる。そこで行われるのが薪炭材の造成、住宅の周辺に庇陰樹を育てたり防風林を造成して生活環境を改善するための植林、干はつ時に収入が得られるための備蓄薪炭林造成などである。そしてこれらを円滑に行なうための技術開発などがある。この国に限らずアフリカでは女性の労働力は大きく、彼女らの協力なくしては住民による造林が成立しないほどである。苗木の無料配付、モデル農家の育成はこの点普及にも役立っている。しかし、技術面、作業のスローペース、収入問題など将来に残された課題は多い。